漢字は“消えない言葉”

ところが、漢字は言葉のように、現れるや否や消えてしまうことがありません。つまり、覚えるまで待っていてくれるものです。だから、言葉の覚えられない重度の脳障害児、精薄児でも覚えることができるわけです。

でも、こういうことは、そういう事実に何回も出合うことによって、あとから考え出した理由であって、そういう事実に出合うことがなかったら、とても考え出すことはできなかったと思います。だから、そういう事実に出合ったことのない読者諸氏には、なかなか信ずることができないと思います。信じられないのが、むしろ当然だと思います。

だから、そういう事実を自分で体験するまで、私の言うことを信じないで下さって結構です。ただ、石井にだまされたと思って、だまされてもともとだという気持で、実践してみて下さるとよろしい。そうすれば、私と同じように、きっとこの事実に驚嘆されるだろうと思います。

実は、この事実の発見も、ドーマン博士は私と同じようにしているのです。私とドーマン博士とは、遠く太平洋を距てて全く相会うこともなく、同じ事実に出合い、同じ理由を考え出していたのです。それは、それまで誰からも気づかれなかった事実が発見される運命にあった、そういう時期に達していたのだ、というような思いが致します。

漢字はその典型的なものですが、文字というものは、もともと“目で見る言葉”です。耳で聞く言葉は、発せられるやいなや消えてしまうので、昔は、大切な言葉を残すためには、語(かた)り部(べ)のような存在に頼らざるを得ませんでした。“消えない言葉”は、人類の願望だったのです。

その願望は、“目で見る言葉”文字の発明によって果たされました。百万年に及ぶ長い人類の歴史の中で、やっと達せられた願望だけに、それは“耳で聞く言葉”よりも当然高度のものであり、従って学習に困難なものであるに決まっている、と思い込んだのも道理だと思います。

人間は言葉（ただし発音を伴わない、学問用語では“内言”と呼ぶ）で思考し、その思考を言葉で他人に伝えます。人間はこうして知恵を蓄積することにより、百万年の長い年月を一歩一歩前進して、現代の

文明社会を築き上げました。

チンパンジーは、生後の 2 年間くらいは人間の子供に負けないだけの知恵を持ちながら、言葉を持たないために、今でも百万年前とまったく同じ生活をしています。チンパンジーに、人間が言葉の教育を施したら、チンパンジーは言葉を覚えるだろうか。言葉を覚えたら、チンパンジーの生活がどう変わるだろうか。

そんな好奇心から、チンパンジーに言葉を教える試みが1930年代以後盛んになりました。

その中で、アメリカのケロッグ夫妻により、グアと名付けられたチンパンジーが、生後約 1 年半にわたる教育で約百語を理解することに成功したことが報告され、有名になりました。けれども、言葉を使うことは、まったくできなかったと報告されています。

その後、ヘイズ夫妻やガードナー夫妻等の貴重な報告があって、1970 年代に至り、プリマック夫妻やジュアン･ランボー氏により、視覚文字を教育することによって驚くべき成果があったことが報告されました。

プリマック氏のサラと名付けられたチンパンジーや、ランボー氏のラナと名付けられたチンパンジーは、いずれも百数十の文字（それは全く象形的性格を越えた純然たる符号）を覚え、これを使って文章表現（英語の文法に則った）を行ない、人間と思想を交換することに成功したのです。

これらの事実は、まだそういう指摘がだれからもなされていませんが、私は、「視覚言語が聴覚言語よりも覚えやすい」ためであり、また、それを実証する証拠になる事実だと思っています。